

九州大学 言語文化研究院

## 言語文化研究院

I	研究の水準	.....	研究 13-2
II	質の向上度	.....	研究 13-4

## I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

### 分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）において、論文発表は284件、著書刊行は80件、学会発表は304件となっており、学会発表のうち132件は国際学会・研究会での発表となっている。
- 科学研究費助成事業の採択件数（新規・継続）は、平成22年度の15件から平成27年度の31件となっている。また、平成27年度においては、専任教員48名のうち30名が採択されている。
- 「日本語学習用基本動詞用法ハンドブックの作成」等、言語教育の教材研究・開発を中心に共同研究を行っている。また、海外の大学と学術交流協定を締結し、海外の研究者との共同研究を行っている。

以上の状況等及び言語文化研究院の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

### 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学術面では、特に外国語教育、ヨーロッパ史・アメリカ史の細目において特徴的な研究成果がある。また、国際的な学術雑誌に掲載された研究成果がある。
- 特徴的な研究業績として、外国語教育の「外国語としての英語ライティング能力の発達」、ヨーロッパ史・アメリカ史の「12世紀前後のバルセロナ伯領における征服・植民と国家形成」がある。
- 社会、経済、文化面では、特に中国文学の細目において特徴的な研究成果がある。

- 特徴的な研究業績として、中国文学の「中国演劇・小説研究」があり、戦前の中国演劇研究者が収集した資料を整理し展示会等に出品するとともに、一般向け講演を行い、マスメディアに取り上げられている。

以上の状況等及び言語文化研究院の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、言語文化研究院の専任教員数は 36 名、提出された研究業績数は 9 件となっている。

学術面では、提出された研究業績 9 件（延べ 18 件）について判定した結果、「SS」は 1 割、「S」は 9 割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績 1 件（延べ 2 件）について判定した結果、「S」は 5 割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1 件の研究業績に対して 2 名の評価者が判定した結果の件数の総和）

## Ⅱ 質の向上度

### 1. 質の向上度

〔判定〕 改善、向上している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 研究成果の発表件数について、平成 16 年度から平成 19 年度と第 2 期中期目標期間を比較すると、論文は平均 38.5 件から平均 56.8 件へ、著書は平均 8 件から平均 13.3 件へ、学会発表は平均 32.8 件から平均 50.7 件へ、それぞれ増加している。
- 国際学会発表件数は、平成 16 年度から平成 19 年度の平均 5.5 件から、第 2 期中期目標期間の平均 22 件へ増加している。
- 科学研究費助成事業の採択率は、平成 19 年度の 42.9%から平成 27 年度の 62.5%へ増加している。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 学術面では、特に外国語教育、ヨーロッパ史・アメリカ史において特徴的な研究成果がある。また、国際的な学術雑誌に掲載された研究成果がある。社会、経済、文化面では、特に中国文学において特徴的な研究成果がある。

これらに加え、第 1 期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。